

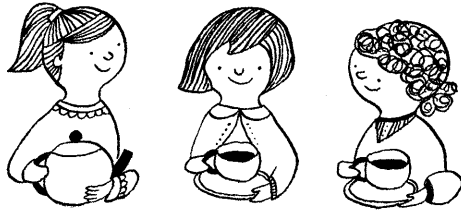
## 幼稚園教育要領改訂に寄せて

松村 和子

この二〇〇八年春、幼稚園教育要領が改訂され、来年度から施行されることになりました。保育所保育指針ほど大きく変わらないとはいえ、現場ではその改訂に合わせて幾つか見直してみることがありそうです。また、昨年には教育基本法、学校教育法が改正されており、合わせて自分たちの実践にどう影響してくるのかを考える必要があるでしょう。

### 幼稚園の教育の重要性

「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであること（教育基本法第二章第十一条）」、また、学校教育法の第一章総則の第一条で、学校の規定が幼稚園から始まっていることを合わせて考えると、幼稚園での教育が、その子



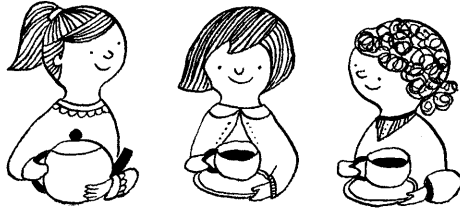
どもの生涯にわたる大事な意味をもっていることが示されています。小学校以上の教育の基礎としても位置付けられていますが、幼稚園教育は「幼児期にふさわしい形」で、「環境を通して」、「一人ひとりに合わせて」……ということになっていきますから、よほどしっかりとした教育課程や指導計画を立てて、そのうえで一人ひとりの子どもの発達を見ていかなければなりません。しかも、幼稚園の教育は、小学校以上のような教科教育ではないので、なかなかその成果が見えにくいという問題があります。保護者にも「遊んでばかりでは……」「文字の教育はしないのですか？」などと、目に見える形で評価できる保育内容を求められることがあります。幼稚園の教育が、子どもの生涯にわたる基礎となっているのだということをいかに保護者へ伝えていくかということが、今回の改訂に際してますます重要になってくると思います。

また、学校教育法の第四章第四十二、四十三条にあるように、小学校では学校評価、保護者への情報開示が求められます。私たち幼稚園教員は、一人ひとりの子どもの発達についての評価や日々の指導計画の振り返りはいつもしていますが、園全体の評価については、まだまだではないでしょうか。何を、どのように評価したらよいのだろうか……と思う園が多くあるように思います。幼稚園の教育は、幼稚園教育要領にのっとって進められているとはいえ、その保育の実際はさまざま多様性が

あります。全ての園に当てはまる評価基準はないのでしようから、文献や先行研究を参考にしながら、その園独自の評価項目や基準を定めていくことが必要でしょう。園の全教員がそれを共通理解したときに、保護者に「うちの園ではこういうことを大事にして三年間を過ごしています」と自信をもって伝えることができるでしょう。小学校も幼小連携に力を入れており、先日は、近隣の小学校から園の教育課程を教えてほしいという要望がありました。幼稚園の教育がどういう形で初等教育の基礎になっているのかを互いに考える必要もありそうです。

### 特別支援教育への取り組み

入園前に保護者から相談があつて「障碍<sup>がい</sup>」がわかっている場合もあるでしょうが、いわゆる「気になる子」は、入園後の保育の中で「あれっ」と思い、そこで教員の配置をあれこれ工夫しながら保育に当たることになります。今は、どの園でもこのような子どもたちと、試行錯誤しながらかかわっておられるでしょう。その場合、その子どもの抱える困難の理解をし、その子の課題に沿ってかかわりたいと思います。同時にその子のいるクラス全体の保育も考える必要があります。保護者にもその子の課題を知っていただき、専門機関の受診をすすめる場合もあるでしょう。保護者の気持ちも支える必要があります。こうしてあれこれ考えていくと、特



別支援というのは単に障碍のある子を受け入れればよいというのではなく、その子どものもつ困難の理解、そしてそれに基づく個別の計画作成、担任などへの実際の指導の支援、保護者への支援、連携した専門機関とのやりとりなどたくさん仕事があることに気づきます。それで、「特別支援コーディネーター」と呼ばれる役割の人が必要だということになるでしょう。しかし、多くの幼稚園ではなかなか人的余裕はありません。誰がその役割を担うのか検討してみると、その園に必要なことが見えてくるのではないのでしょうか。

しかし、その人だけに任せるのではなく、保育そのものは園全体の教員チームで行うことを忘れてはならないと思います。今は、できる限りどの子どもも一緒に保育を進めていくのが世界の潮流です。単に一緒にいるだけではなく、その子ども周りの子どももよりよく生きることができるような体制をつくりたいと思います。

### 終わりに

今回の幼稚園教育要領の改訂では、幼稚園教員の専門性がさらに増してきたの思いを感じています。子どもとは楽しく、生き生きと保育・教育を進めることが大事ですが、保護者や関連機関や小学校とも「幼児教育」についてさらに深く語れるように専門職としての力量を磨きたいと思っています。

(文京学院大学)